

病気のおかげで、人生を積極的に すこす生き方を学んだ。

広島教会 佐々井一郎さん

佐々井さんは、目の硝子体出血とパニック障害を患っている。どちらも投薬や手術によって短期間で治癒するのではなく、その不安から物事を悲観的にみるようになり、鬱々と過ごしていた。しかし、妻や義母、仲間たちとのふれあいのなかで、少しずつ前向きになっていく。ある日、隣家の桜の枝が、自宅の外壁に当たるほど伸びていたことがあった。隣家の主人を見かけた時、怒りの言葉が思い浮かんだが、咄嗟に「いいサクランボの実ですね」と笑顔で声をかけた。するとその夜に、隣家の主人が籠いっばいのサクランボをくれ、数日後には伸びた枝を切り、謝ってくれたという出来事があった。人を責める前にまず自分から心を寄せることで、人間関係をあたたかなものにしたのだ。このことをきっかけに、「まず自分から」と積極的になり、病気に対しても、「一生つきあっていくもの」と受け入れ、そのときそのときを大事に生きるように心がけた。いまでは不安も和らぎ、人生を粗末にしない生き方ができるのは「病気のおかげ」と佐々井さんは話す。



まず自分から

この春、熊本県を中心に大きな地震が発生しました。いまでもまだ不自由な生活を余儀なくされている方がおられ、胸が痛みます。そうしたなか、ご自身も被災して生活が困難であるにもかかわらず、地震発生直後から知人の安否を気遣い、奔走された方が大勢いたと聞きます。だれにいわれるでもなく物資を届け、話に耳を傾け、一緒に涙して苦しむ人を励まし続けた方々。そのなかの一人は、「自分がなぜ寝食も忘れてそうするのか、自分もわからない」と語っておられたそうです。「私は慈悲して慈悲を知らず」という言葉がありますが、自らの心突き動かされ、そうせすにはいられない。だから、けつして苦しいともつらいとも感じず、むしろそのご縁を喜びと受けとめて走り回っておられる様子が目に浮かびます。

「まず自分から」と率先躬行し、あるいは「まず人さま」と心を砕き、まさに心の命じるまま、とらわれることなく、喜びをもって救いに奔走されたみなさんの、こうした話をうかがうと一人ひとりの思いやりが実践にうつされたとき、そこにどれほど大きな安心が生まれるのかをあらためて教えられた思いがします。

立正佼成会